－書　評－

西村　登（1987）「ヒゲナガカワトビケラ」日本の昆虫9，文一総合出版

竹門　康弘（京大・理・動物）

渓流に棲む昆虫であるヒゲナガカワトビケラについて，生活史・習性・個体群動態・分布などの研究成果が，読みやすくまとめられている。しかも，ヒゲナガカワトビケラ1種のみを対象とした読物でありながら，水生昆虫学における課題が，数多く言及されている。本書の文脈には，常に自然史的観察から出発しながら，疑問を投げかけるうちに，生態学的課題に行き着くという特色が見受けられた。著者自身の研究は，豊富な野外観察を基礎に，30年にわたる独学によってなされてきたと記されている。また，高校生物部の研究をはじめ各地のナチュラリストの研究成果が自説の例証や今後の課題として位置づけられている。こうした著者の姿勢によって，自然史に根ざした科学書が生まれたと思われる。

近年の科学論文は，情報化社会の世相を反映して1テーマ1論文の形式となり，限られた議論に関わる結果だけを記す傾向にある。ところが，特に生物相手の場合，観察中に起こる出来事にはテーマから外れたものも多く，論文作成中に切り捨てられてしまいがちである。こうした傾向は，観察事実を等価におもしろがるナチュラリストの立場から見ると，興醒めであるともいえる。さらに，自分の発見を論文にしようと志すナチュラリストにとって，観察の中から一部だけを切り出して学説として位置づける作業は破り難い壁となる。一方，生態学は，自然史的観察の上に，科学的方法論を導入することによって始まった。見方を変えれば，種に関する膨大な記載があって初めて科学的方法論を導入できたのである。ところが日本においては，この記載段階が手薄であった。過去および今後，ナチュラリストによる発見が上記の壁ゆえに埋もれてしまうとすれば，生態学の発展にとり大きな損失である。

本書は，こうしたナチュラリストに刺激と勇気を与えてくれる。研究課題として価値のある現象が，「ヒゲナガカワトビケラ」という1種についてだけでもどれだけたくさんあり，今も読者の観察を待っていることか。そして，その各々が，水生昆虫をめぐる生態学の学説とどう関わるかを具体的に示してくれる。いわば，自然史的観察と生態学との橋渡しとして評価される。したがって，水生昆虫学への優れた入門書であるといえよう。この1冊との出会いにより，水生昆虫の生活の秘密を解くおもしろさに魅了される方が数多く現れることを期待している。

ヒゲナガカワトビケラと私

ヒゲナガカワトビケラは，トビケラ目に属する川虫の1種ですが，一般の方々には聞き慣れない名前です。でも日本列島の川では，川底が礫底なら多くの場所で見られる普通種です。

私が幼少の頃は，家の近くを流れる川へ行って，カモジグサというイネ科の植物の穂の部分に，上記のトビケラの幼虫を結びつけ，カジカやアカザなどの底生魚を釣って遊んだものです。私たちの地方の方言では，幼虫のことをエムシ，成虫をチョコと呼んでいました。成虫は前翅をもぎとって腹部を釣針につきさし，雑魚（ざこ）釣りの餌として利用していました。

また長野県の伊那地方では，以前から川虫の幼虫を佃煮（つくだ）にし，“ざざむし”と名づけ，土産物として売っていますが，このざざむしの主役はヒゲナガカワトビケラです。こんなわけで，ヒゲナガカワトビケラと人間とは昔からかなり縁があったわけです。

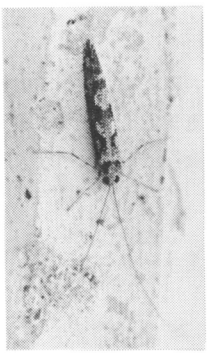


図1 ヒゲナガカワトビケラ成虫(♂)

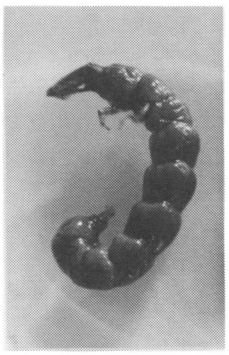


図2 ヒゲナガカワトビケラ幼虫(5令)

私が，この虫とより深くかかわるようになったのは，1956年4月から1年間京大動物学教室へ内地留学させて頂いてからです。それ以来，細々ながら今日まで，この虫とつきあってこられたのは，留学当時お出会いした先生方・先輩の方々の引続いてのご指導とお励ましのおかげです。また今回本を書くに当っては，若い仲間の方々にいろいろ助けて頂きました。

一方私自身，ヒゲナガカワトビケラとつきあってきて，この虫たちから多くのことを教わりました。毎年，成虫が活動する5月に入ると，胸がドキドキし，もうじっとしておられず，川へ飛び出していきます。私にとって，ヒゲナガカワトビケラは永遠の恋人なのだと思います。

（兵庫陸水生物研究会　西村　登）